ミドル企業 きらり

九州電化／めっき

九州電化（福岡市）が主力のめっき技術の活躍の場を広げている。最近では川崎重工業が開発した世界初の液化水素運搬船の部材へのめっきを手がけた。新型コロナウイルス禍でマスクを収納する抗菌マスクケースも商品化した。少量の受注でも他社の手が届かない新たな分野に果敢に挑む。

被覆 タンクもマスクも ■水素船や抗菌ケース 幅広く

「2隻目の液化水素運搬船へのめっきも受注したい」。九州電化の吉村浩司社長は意気込む。父が創業者で2019年に4代目に就任した。

めっきとは素材の表面を別の金属で被覆する技術。今回めっきを施したのは、液化水素運搬船「すいそ ふろんてぃあ」に搭載する貯蔵タンクの部材だ。この船は川重や岩谷産業などの企業連合がオーストラリアで製造した水素を日本へ輸送する実証実験に使う予定。脱炭素化社会に向け水素は次世代エネルギーとして期待され、船は30年の商用化を目指している。

水素はマイナス253度まで冷やして液化し、海上輸送する。タンクには高い強度を持ちつつ熱伝導を抑制できる繊維強化プラスチックを採用した。めっきは液化水素の蒸発を最小限に抑える真空や断熱性能の向上のために欠かせない。

だが、吉村社長によると、プラスチックは場所によって表面の状態が異なり、めっきは難しい。基本的な方法はあっても「いかに失敗と改善を繰り返したか、豊富な経験が物を言う」（吉村社長）案件を受注した。

高い技術力の活用先は大型案件にとどまらず、コロナ対策の製品分野へも広がった。医療従事者から「食事中に外すマスクを置く場所がない」との話を聞いた社員が、抗菌マスクケースの商品化を提案した。吉村社長は「そのときは売れるか疑問だったが、勉強になるかな」とゴーサインを出した。

もともと抗菌についての知識はあった。あとはどう形にするかだ。試行錯誤の中で、銅と銀イオンを吸着させた粒子をコーティングした抗菌プレートを皮革に装着し、マスクを挟む形となった。他社の製品や材料を預かりめっきする同社にとって商品を開発から販売まで自社で一貫して手がける貴重な経験となった。

「抗菌マスクケース」（税込み3300円）は黒やピンクなど8色を用意。名前を刻印でき、イベントや記念日のプレゼントに使えるようにした。通販で販売を始めたところ、ホテルの引き出物や取引企業のノベルティーとしてまとまった注文も入った。

九州電化の高い技術力を証明する社員の1人が、技術開発部の中野寛文部長だ。厚生労働相が各産業分野で卓越した技能者を表彰する「現代の名工」をめっき業界で初めて受賞した。技能だけでなく、後継者の育成にも積極的に貢献している点も高く評価された。

同社の代表的な仕事はJR九州の豪華寝台列車「ななつ星in九州」や重粒子線がん治療装置へのめっき。最近は半導体製造機器へのめっきが増えている。吉村社長は「あらゆるものがターゲット。失敗をしても別のところで生かせる」と話す。挑戦は尽きない。

（西部支社 小田浩靖）

抗菌マスクケースを持つ吉村社長（福岡市内の工場）

《会社概要》
▽本　　社　福岡市
▽事業概要　めっきなど表面処理
▽創　　業　1960年5月
▽従 業 員　95人（2021年10月）
▽売 上 高　8億9000万円（2021年4月期）

中小経営